

はじめに——本書のねらいと構成——

日本近世、また近代初頭にかけての書籍流通についての研究はいまだ手薄である。その理由としていくつかが考えられる。まず実態を明らかにできるような資料が見当たらない（あるいは見当たらないと思われる）こと、また研究方法が確立していないことが大きいだろう。そして、右の事態のおおもとの理由なのであるが、何よりも、困難を容易に予想しうるこの分野の研究に踏込んでいこうとするだけの動機付けが熟していなかったことにもよるはずである。

本書は、書籍流通に関わって、その資料について紹介、また論じた旧稿を吹き寄せて仕立てたものである。いずれも初出のままではなく、かなり手を入れてある。

本書は次の三部で構成してある。

第一部 書籍流通史研究の意義と方法

第一部は次の二章から成る。

第一章 出版とは何か——開版を促す原動力としての流通——

初出は『ナオ・デ・ラ・チーナ』九号（二〇〇五年一月）所収の同題文章。

第二章 書籍流通史研究の意義と方法、その資料

初出は『日本の文字文化を探る——日仏の視点から——』（勉誠出版、二〇一〇年三月）所収の同題文章に、『調査研究報告』二七号（二〇〇七年二月）所収「十九世紀日本の書籍流通について考える」の一部を取り合わせた。

まず書籍の流通とその史的展開をとらえることの意義を論じた文章を配置して、問題意識の所在、本書全体のねらいを示してみた。また、書籍の流通機構をどのように捉えるべきか、また書籍の流通をとらえるために、どのようなものが資料としての可能性をもつかという総論を据えて、第二部以下の各章の意図を見えやすくしたつもりである。

第二部 書籍流通のさまざま、史料のさまざま

第二部は次の六章から成る。

第一章 仕入印と符牒

初出は中央大学文学部『紀要』一八〇号（二〇〇〇年二月）所収同題文章。

第二章 近世日本における薬品・小間物の流通と書籍の流通

初出は中央大学文学部『紀要言語・文学・文化』二二四号（二〇〇七年三月）所収同題文章。

第三章 店頭の商品広告——「看板」小考——

初出は同『紀要言語・文学・文化』一〇三号（二〇〇九年三月）所収同題文章。

第四章 近世日本における大般若経流通の一相

初出は『中央大学国文』四七号（二〇〇四年三月）所収同題文章、および『ナオ・デ・ラ・チーナ』八号（二〇〇五年一月）所収「東叡山版大般若経流通の一史料」。

第五章 京都の絵草紙屋和久屋治兵衛・桜井屋治兵衛

初出は中央大学文学部『紀要言語・文学・文化』一〇七号（二〇一二年三月）所収同題文章。

第六章 『以辰新刻書目便覧』の諸本

初出は同『紀要言語・文学・文化』一〇五号（二〇一〇年三月）所収同題文章。

書籍にさまざまあり、その流通もさまざまである。単線的に捉えることができないう流通の実態をとらえるためにどのようなものが資料として考えられるか、また、それらを資料として生かすためにはどのような発想と手口が有効かという論点でまとめたものである。

第一章は、書籍に残された流通の痕跡である仕入印と符帳について、その資料的有効性と限界とを考察した。

第二章は、書籍業者の兼業の状況と、書籍以外のものの流通に書籍の流通が依存している部分があることを考察したもの。薬品の広告や小間物屋の文書等を使ってみた。

第三章は、書籍の表紙芯紙として貼り込まれていた書籍の店頭広告「看板」の断片を新出資料として紹介したもの。

第四章は、一般の書籍とは異なる大般若経の流通について、数例を紹介してみた。次の二つの文章に基づくが、本書収載に際して、一本にまとめ、また新見を少々加えた。ここでは、通帳、引札、領収書を含めた文書資料等、比較的オーソドックスな資料を用いている。

第五章は、京都の一絵草紙屋の家文書を使ってその営業の実態を探ったもの。絵草紙業については文書資料の遺存が稀である。一事例に過ぎないが、この新出文書資料によって、この稼業の具体的なところが浮かび上がったはずである。

第六章は、書籍流通資料として有効に使える書目について、その修訂状況を示し、利用する際のガイドとしたものである。明治七年刊の『以辰新刻書目便覧』は、維新以来の東京における出版物の目録として便利に利用されているものであるが、この手の出版物のご多分に洩れず、何次もの修訂が行われており、どの本を用い、それがどの段階のものであるか自覚的でない危険な資料といえなくもないのである。

### 第三部 貸本という書籍流通

第三部は、書籍流通の大きな部分を占める貸本屋について、その営業の実態や蔵書構成をとらえる方法の一端を提示してみた文章で構成した。

#### 第一章 貸本屋の営業文書

初出は中央大学文学部『紀要』一九九号（二〇〇四年三月）所収の同題文章。

#### 第二章 貸本屋沼田屋徳兵衛の営業文書

初出は『国語と国文学』九九〇号（二〇〇八年五月）の同題文章。

#### 第三章 信州諏訪升屋文五郎の貸本書目

初出は『江戸文学』三九号（二〇〇八年十月）の同題文章。

第一、二章は、貸本屋旧蔵書の表紙芯紙や裏打ち紙として使用された反故に営業文書が使用されている例を報告し、日々の営業内容等、これまで実証することが困難であった貸本屋の実態にどこまで迫ることができるか、資料の有効性と限界とを考察してみた。

第三章は、報告例の僅少な貸本屋の蔵書目録を一点紹介し、貸本屋の蔵書構成等について考察してみた。

はじめに

万全の資料というものはありえないであろう。とくに、ここに収めた論考たちが検討の対象としたものは、資料としてはなほ頼りないものたち、そのうえきわめて扱いにくいものたちがほとんどである。単独では自立しえないもの、他の資料の力を借りないと意味をなさない半端なものたちである。収集し分析する苦勞に比しては、あまりに見返りの少ない、効率のきわめて悪い資料なのである。

しかし、だからといって、捨て置くべきものではなからう。これまで利用されてきた認知度の高い資料からは、見えてこないような世界を垣間見せてくれまいものではないからである。これら片々たる資料を素材として料理を試みただいで、まずくて食べぬものも多いであろう。満ち足りていけば無理して食すまでもないかもしれない。しかし、飢餓に臨んでの糧物、鼻をつまんで飲み込んで命をつないだ先で見えてくる世界もあるのではなからうか。

二〇一二年五月吉日

鈴木俊幸識

目次

はじめに——本書のねらいと構成——……………(1)

第一部 書籍流通史研究の意義と方法

第一章 出版とは何か——出版を促す原動力としての流通——……………3

一 『好色一代男』の手柄……………3

二 貸本屋という流通機構……………6

三 流通のための開版……………11

第二章 書籍流通史研究の意義と方法、その資料……………19

一 出版と流通……………19

二 草紙類の流通……………20

三 本屋という商売……………25

四 貸本屋……………30

五 享受の実相……………31

六 書籍環境……………33

七 書籍流通史研究の資料……………34

第二部 書籍流通のなまなま、史料のなまなま

第一章 仕入印と符牒

はじめに

一 仕入印

二 符牒

三 高美屋甚左衛門の仕入先

四 高島藩校と藤屋伝右衛門

五 家・個人の購書

六 信濃の書商

おわりに

第二章 近世日本における薬品・小間物の流通と書籍の流通

はじめに

一 小間物と書籍、小間物屋と本屋

二 薬と本、薬屋と本屋

おわりに

47  
47  
64  
72  
80  
81  
83  
99  
101  
101  
121  
153



目次	
第三章	店頭の書籍広告——「看板」小考——……………159
一	店頭的光景……………159
二	看板の制作……………163
三	表紙裏から出てきた看板……………165
第四章	近世日本における大般若経流通の二相……………179
一	須原屋茂兵衛と大般若経……………179
二	須原屋茂兵衛の通帳……………182
三	上野板……………188
四	大般若経の価格……………192
第五章	京都の絵草紙屋和久屋治兵衛・桜井屋治兵衛……………203
	はじめに——絵草紙屋と絵草紙屋研究——……………203
一	和久屋治兵衛・桜井屋治兵衛の出版物……………205
二	和久屋治兵衛と桜井屋治兵衛……………221
三	絵草紙屋商売開始、版木・本屋株の取得……………226
四	新内節正本の出版・販売……………242
五	土地・家屋の取得……………253

六	町と商売と……………	264
七	戊辰戦争と会計基金……………	279
八	京都の絵草紙屋……………	282
	附録・桜井屋治兵衛家文書目録……………	287
第六章	『戊辰新刻書目便覧』の諸本……………	297
	はじめに……………	297
	一 諸本……………	298
	二 校異……………	306
	三 刊行の背景……………	328
第三部	貸本という書籍流通……………	
第一章	貸本屋の営業文書……………	337
	はじめに……………	337
	事例一……………	339
	事例二……………	345
	事例三……………	352
	事例四……………	359

目次

事例五	388
事例六	393
おわりに	403
第二章 貸本屋沼田屋徳兵衛の営業文書	407
翻刻 沼徳の営業文書	409
おわりに	426
第三章 信州諏訪升屋文五郎の貸本書目	431
おわりに	447
書名索引	左1
人名索引	左19

sample

第一部

書籍流通史研究の意義と方法

sample

sample

## 第二章 出版とは何か——開版を促す原動力としての流通——

### 一 『好色一代男』の手柄

書籍の出版を考える上で、流通の問題を視野に入れることの有効性、流通の問題を棚上げして論ずることの危険性を、具体的な事例に即して考えてみたい。

『好色一代男』はたしかに日本文学史上画期的な作品であった。同書の内容の優れたものであることはすでに大量の論も備わり、今さら専門外の筆者が贅言を弄するまでもない。まさに国民的常識の一つであろう。この極めて気まぐれな出版が、その好評によってその後の西鶴作品の続作を促し、それらに参与した大坂の本屋たちの成長に大きく寄与したということについても多くの論が備わる。

大坂の出版業が、京はもちろん、江戸にも大きく遅れて成立することは、濱田啓介『生玉万句』以前の大坂刊本を疑う<sup>(1)</sup>ですでに指摘されている。塩村耕「初期大坂の出版界について——付、元禄末年以前の大坂版元と出版物一覧——」<sup>(2)</sup>は、地誌類の記事を網羅し元禄末年までの大坂書肆出版物を丹念に洗い出した上で、精緻な再検討を行い、ほぼ同様の結論に達している。そして初期大坂の出版物の特徴的傾向として、「物之本」の分野が

弱く、重宝記類や地誌などの実用書、俳書と西鶴本に代表される「新作」類の充実ぶりをあげている。

出版がその地で行われる以前に大坂に本屋が無かったわけではない。延宝七年（一六七九）三月刊『難波雀』や同年七月刊『難波鶴』などの地誌類にも本屋の記事が見受けられる。また、長友千代治〔石橋家乗〕の読書記事<sup>(3)</sup>に指摘があるが、寛文五年（一六六五）十一月には大坂高麗橋の本屋秋田屋仁兵衛が石橋家を訪れて書籍を売っている。

後代に比べて書籍の流通量のさほど多くなかった近世初期においては、大坂の本屋が出版に乗り出す必然性に乏しかった。大坂は京都に近すぎる。京都から仕入れてきた書籍の流通で自足し、リスクを伴う出版事業には消極的であったのであろうと筆者は考えている。

そのような小規模な本屋営業を続けていた大坂書商を出版事業に駆り立て、大坂の出版業を隆盛に導いた原動力の一つが西鶴本であったのである。きっかけを作った『好色一代男』、そして西鶴はもつと褒められてよい。

『好色一代男』が「好色本」と称される書籍の流行を齎したこともすでに指摘されて久しい。『好色一代男』出版の三年後、貞享二年（一六八五）に出版された『広益書籍目録』には「好色之類并楽事」の項目が設けられ、ここに掲げられている五十三点の書目の中に、「好色一代男」をはじめ、「好色本」と称されることになる書籍が多く混じっている。元禄九年（一六九六）刊『書籍目録大全』には「好色本」の項が設けられ、八十点の書目が並んでいる。すでに、「好色本」は一ジャンルとして安定した名称を勝ち得ている。その点数に鑑みれば大坂のみならず京都にも「好色本」産業が成立していること、もう少し控えめに言えば、好色本という新しい商品ジャンルを含みこんで書籍の産業がより大きく幅を広げていることは明らかである。

いままらの感もあるが『元禄太平記』巻一（都の錦作、元禄十五年刊）を引いてみる。<sup>(4)</sup>



京都の書林が「よきかなや近年、重板類板御制禁たりといへども、京都の板を大坂で重板し、大坂の板を江戸にて類板する事、是亦憂の一つなり」と大坂の本屋にぼやく。京都の書林は、逸早く主要な書物の版木を確保しており、それが強みであったわけであるが、そのいわば「既得権」を脅かすのが、「御制禁」の及ばない他の地域での重版・類版行為であった。先行している者ならではの悩みではある。京都から他の地域へという一方的な商品の流れであったものが、他で生産された同様の商品が逆に京都にも流れてきかねない流通の変化も意味している。

京都の書林は「当世はたゞかたひ書物を取り置いて、あきなひの勝手には、好色本か重宝記の類が増じや」と続ける。投下資本の回収が長期にわたって少しづつ行われるような書物類の商売に備わっていた安定性が脅かされるような状況においては、大坂の本屋が手がけているような、短命であろうと流行のただ中であって当座の売行きのよいものを羨ましがっているのである。

大坂本屋はそれに対して「仰ればそうじや、すでに大坂におゐて、家内重宝記が出来はじめしより此かた、其類棟にみち牛に汗するほどあり、しかれども此ごろは、はや重宝記もすゑになり万宝にうつる、諺解古ふなれば、詳解あらたまり、大成すたれば、集成おこる、とかく書物も飛鳥川、附丁のかはる世のあきなひ、時うつり事さり、古板尽、新板おこる中にも、永ふ流行は好色本なり」と、重宝記類の商売の、流行に棹差して次々と新商品を開発していかなくてはならない状況を訴え、それに対して好色本という商品の堅調ぶりを誇っているのがある。そして「此道の作者西鶴といふ男出生して、……」と、好色本という商品開発の基を築いた西鶴の手柄を称える言葉が後に続く。

## 二 貸本屋という流通機構

さて、その「永<sup>なが</sup>ふ流行<sup>はや</sup>」ジャンルとされる好色本はいつたいどれくらいの高格であったのか。元禄九年（二六九六）刊『書籍目録大全』には、値段付が施されている。好色本の項を少々引いてみる。

好色本			
秋田や市	八	好色一代男 <sup>かうしやく</sup>	五匁
池田や三右衛門	八	同二代男	四匁五分
西村一郎右衛門	五	同三代男	三匁
同	二	好色おとこ	一匁五分
同	四	京紅	式匁
同	三	八人芸 <sup>げい</sup>	式匁

天和元年（二六八二）刊『書籍目録大全』巻頭に、

右之直段付者下本之分也。上本中本者依紙之品直段之高下有<sup>これよりやくすこれのものなり</sup>之故<sup>なり</sup>畧<sup>なり</sup>之者也。

と、この値段が目安に過ぎない旨の口上を記している。書籍目録が本屋向けの出版物とみなしうるので、その目

安とは業者間取引のためのものであると思われるが、ここに示された価格は卸値ではなく、いわゆる「正価」に近いもの、後で触れる「本替」の価格であろうと思われる。卸値はこの七割とか八割とかになる。

実際の販売価格は、これに移送のコストなどを付加したり、コンディションや在庫状況等の諸要素を加味して上下したものであるが、ここに掲出されている好色本、いずれも、一過の娯楽の対価としては安いものではないだろう。<sup>(5)</sup> いったいどのような人間がこの手の本を慰みのために買い求めるのだろうか。いかに流行のただ中にあるものであるといっても、はたしてそれほど多数の購置者を得たものかどうか極めて不審である。安易にベストセラーと言つてよいものとは思えない。しかし、これらの出版が商売として成立していたことは、このジャンルのものが次々と開版され、ここまでの一群を形成していることをもって自明とすべきではある。

時代は随分くだるが、馬琴の読本の発行部数については、濱田啓介「馬琴に於ける書肆、作者、読者の問題」<sup>(6)</sup>に詳しい。あれほどの人気を誇つた『南総里見八犬伝』すら、発行当日には三〇〇から四〇〇部、増刷分を含めても、発行後一年ほどに四〇〇から五〇〇部という発行部数であったことが明らかにされている。そして、草双紙類に比して格段に高価な読本が貸本屋という流通に向けた商品であったことも論じられており、このことについては、その後の論も多いところである。

『好色一代男』が世に出て以後、好色本等娯楽性の強い書籍群が陸続と生産されていくということについても読本類と同様の流通を考えないわけにはいかないのではないだろうか。

先掲長友千代治「〔紀州藩家乗〕の読書記事」に紹介されているように、紀州藩付家老三浦家の儒医石橋生庵は、江戸勤番中の貞享元年（一六八四）、書肆与兵衛から『好色一代男』『好色二代男』を借りている。長友は貸本読書は「くだけた内容のものが多い」と指摘する。

好色本の安定的な開版と高値での流通とを支えていたのは貸本屋という流通機構であり、好色本は貸本屋向けの商品として生産されていったと思われる。

好色本は、あくまで一時の心遣りの具であり、「多くは文車も見苦し」いものであろう。家の蔵書を構成するに相応しいものであるはずがない。消耗品的に消費するには価格が張りすぎている好色本は、借りて読むのが基本であってしかるべきであろう。後世流行の洒落本の、一般の書籍流通網とは異なるものであり、その機構向けに特化して制作されたものであるところが、このジャンルへの関心を一層盛り立てていたのであろうということもかつて論じたことがある。<sup>(7)</sup> 洒落本同様好色本は貸本屋への流通に相応しい。一時の娯楽であれば、ちよつと趣向を変えただけで内容に大差の無いものが次々と生産されることに不思議は無い。貸本業者を育て一つの産業にまで定着させたのは、まず「好色本」であつたと推測しうる。そして直接購買者である貸本屋に商品を供給する本屋、その流通に向けて「好色本」を生産していった本屋の活動が続き、書籍の産業はより広域的に、より厚みをもつたものになっていったのではなからうか。

長友千代治『近世貸本屋の研究』<sup>(8)</sup>は「元禄頃になると貸本中心の行商本屋が出現したらしい」と指摘する。貸本という商いの形態は早くに成立していたわけであるが、それが専業もしくは専業に近い形で成り立つためには、顧客を確保し続けられるような貸本向きの商品の安定的、かつ継続的な供給が必須である。出版はその流通という一面に全く依存しているのである。

『好色一代男』の出版は、好色本という一群の書籍の量産を出来させた。それは貸本屋という流通機構の整備を促すものであり、娯楽のための書籍の安定的かつ継続的な出版を保証した。ひいては大坂をはじめとした新興の書籍業者（出版業者ではない）の興隆、業界の発展に寄与することにもなった。そして娯楽のための読書という

生活習慣を広く定着させる基を作ったのである。『好色一代男』の果たした歴史的役割についてはもつと評価されてよいのではなからうか。

天保三年（一八三二）五月二十一日付篠齋宛馬琴書簡に、

『八犬伝』上帙、壹部ニ付、仲間うり正味拾八匁のよしニ御座候。外よみ本より、格別高料之様ニハ御座候得ども、先日窃ニ諸仕入勘定いたし見候処、惣入用七十六七金かゝり申候。左候へバ、正味十八匁づゝ、ニ三百部うり候ても、さのミ利ハあるまじく候。

と、八輯上帙について初摺分を全部売り切つても儲けはほとんど無いことが語られている。また、文政元年（一八二八）十二月十八日付牧之宛馬琴書簡には、

不佞も『放言』にハ、最初より甚心配いたし罷在候処、此度京都書林にて、式百部引請候よし、取引約束治定いたし、まづ江戸うり三百部のつもりにて、只今五百部すり込申候。うり出し早々、五百部捌候へバ、板代忽にかへり、少々ハ板元ニ利分つき申候。

と、随筆についてはあるが、五〇〇部売り切つてようやく版元の利分が見えてくることが語られている。

元禄九年以前和泉屋三郎兵衛版『好色重宝記』の開版費用の算出を試みてみる。といつても、近い時期の開版費用についての記録は見当たらず、かなり後代のもの、まるで異なるジャンルのものを援用しての座興程度の試

算、お目長に読み流していただければ幸いである。

該書は、中本三巻三冊である。本文彫刻料は、同じ中本の明和六年刊『太平楽府』の事例、一丁あたり三匁五分を適用する(『天秘録』<sup>11</sup>)。挿絵の刻料は仮に四匁としてみる。『好色重宝記』は、三冊で、本文三八丁、うち挿絵都合四丁。本文分の刻料が一一九匁、挿絵分十六匁、合わせて一三五匁となる。これに、題簽刻料を仮に一匁として、合わせて一三六匁。版下筆耕料は『吹寄蒙求』の例(『天秘録』)に従うと、一丁あたり五分、挿絵の版下作成はこれより高いであろうが、抛り所のないまま同じ手間賃としておくと、全三八丁で十九匁。版下紙の費用を一匁と試算しておく。ここまで都合一五六匁。

次は、摺刷して本に仕立てていくのに必要な経費、まずは表紙である。質も大きさも異なっているのでかなり乱暴であるが、他に抛るべき資料を見出せないのも、『海国兵談』の見積の例を援用する。これによると大本の表紙一冊分が二分五厘。中本はこの半分とすると、三冊で三分七厘五毛となる。本文料紙も『海国兵談』の見積に照らすと、一枚あたり二厘ほど(元禄期の紙はもっと高価であったろうとは思われるがこれに依ってみる)、中本はこれの半値とみて、一丁あたり一厘、三八丁で、三分八厘。『海国兵談』の見積では、摺賃は一部につき四分。一枚あたり、一毛ちよつと。書型を無視して、これをそのままあてはまれば、三八丁で約三分となる。仕立代は、これも『海国兵談』の見積によれば、一部につき一分。『海国兵談』は八冊本としての見積なので、一冊あたり一厘二毛半。これも書型を無視してこれをそのままあてはめれば、三冊で三厘七毛半。摺刷と仕立の手間を合わせて、『好色重宝記』三冊一部を仕立てるために必要な経費を三分三厘八毛としておこう。これに、先ほどの本文料紙代、表紙代を足すと、『好色重宝記』一部あたりの印刷・製本経費は一匁一分ほどとなる。

五〇〇部製本すると、五五〇匁、それに板木製作費一五六匁を合わせて七〇六匁。一冊あたりの経費は、壹匁

四分一厘二毛となる。三〇〇部とすると、壹匁六分二厘である。

元禄九年（一六九六）刊『書籍目録大全』には「同（山本八左） 同重宝記（五） 二匁五分」と記載されている。五〇〇部をこの価格で売るとすると、得分は五四四匁。三〇〇部だと、二六四匁となる。一〇〇部だと、十六匁不足で、投下資本を回収できない。現銀取引価格がこの八掛、つまり二匁とし、それを五〇〇部制作して販売するとなると、得分は四五〇匁。三〇〇部だと一一四匁となる。

好色本がどれくらい発行部数であったのかを示す資料は見当たらないが、初摺りで五〇〇部を仕込むということは考えにくい。馬琴の読本の例に照らしても、貸本屋を主たる購買層と見込む娯楽的書籍の初摺り部数は開版費用をぎりぎり回収できるかどうかといったくらいであったと思われる。

つまり、いかに貸本屋への流通が安定的に成立し、発行部数の「読み」がある程度可能になったとはいえ、投入する資本の大きさは、開版という行為をハイリスクなものにしていることには変わりない。出版は大きな賭けである。そして、そのリスクを乗り越えたところで、それほど大きな儲けであったとも思いにくいのである。それなのになぜ、好色本など板木の長命を期待できないようなものや、競合の目まぐるしい重宝記類のようなものを次々と開版していったのだろうか。そして、大坂の新興出版書肆などがなぜ成長をとげていくことができたのだろうか。貸本屋を末端とした流通網の形成という一事をもつただけでは説明しきれないのではないか。

### 三 流通のための開版

『元禄太平記』巻五には、次のような大坂本屋の言がある。